

昔の暮らし聞き取り隊 聞き書き集②

平成26年1月発行

なか た け お
仲 太袈雄 さん

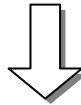
大正11年（1922年）1月28日生 92歳



喜茂別町教育委員会

「聞き書き」とは？

- ◇ 「聞き書き」とは、人から聞いた通りに書き取った記録のことです。
- ◇ 「聞き手」が「話し手」の方のお宅におじゃましたりして、お話をボイスレコーダーに録音します。
- ◇ 後でその録音を聞きながら、できるだけお話しされた内容や口調を生かして、話し言葉で文章にまとめます。
- ◇ それを本人に、確認や修正をしてもらいます。
- ◇ 「聞き手」の感想や批評は一切加えていません。



- ◎ 時代を共有したり、その人の経験から生きる知恵を学んだり、昔の暮らしを今に活かすことができるかもしれません。
- ◎ 地域を守り続けるため、お互いに助け合うことや支え合うことの大切さや楽しさを伝えてくれるかもしれません。

— 月形で生まれて、喜茂別に移り住みました。

私は、大正11年1月28日に石狩管内月形村（現：月形町）の新田ってところで生まれて、9歳までそこにいました。

父親が昭和3年に急性結核になって、罹って1ヶ月半位で死んでしまった。それで、私のような子供が4人もいたでしょ、もう母親はそこには住めなくなった。だから伯父伯母を頼って喜茂別に来たんです。来た時は、比羅岡じゃなくて上目名って名前だったの。喜茂別が村から町になった時に比羅岡になったの。

月形にいたときは、家から近かったから、隣町の当別町立中小屋尋常小学校（中小屋小学校：平成18年3月閉校）に通ったんだけど、喜茂別では羊蹄尋常小学校（羊蹄小学校：平成10年3月閉校）に通いました。本当は高等2年（①）まであったんだけどね、お金がなかったし働くことが大事で、学校へは1年しか通えなかった。あの当時、（羊蹄尋常小）学校は（今の）うちのすぐそばにあったの。昭和8年に今の場所（校舎跡地）に移ったの。

うちの近くの川沿いに、当時澱粉工場が7軒あって、そのうちの1軒が、妻の実家がやっていた工場で、そこで働いた。また珪藻土けいそうどを運搬する仕事を、徴兵検査を受ける時までずっとやってたの。

※①高等小学校：当時、尋常小学校（6カ年）は義務教育であり原則授業料免除・無償だったが、高等小学校（2カ年）は義務教育ではなく授業料を徴収していた。1947年国民学校令施行。1947年現在の6・3制となり、原則無償。

— 喜茂別では、農家で奉公をして暮らしました。

私達家族は、昔、奉公人（^{ほうこう}②）って言ってね、住み込みで年にいくらっていう形で雇われてね。同じ町内の農家にね。

月形でも農業をやってました。自分は10歳未満だったから満足に働けなかったけど。親父が死んでからも2年位やってたんだよね。

父が37歳で亡くなった時、母は当時29歳だったから、とても苦労したと思うけど、98歳まで生きましたよ。

親のことを悪く言うのは嫌だけど、無責任な親父だって思ったね。やっぱり子どもを産んだら、一人前にするのが親の務めだってね。子どもの時はね、つくづくそう思ったよ。

※②奉公：農家や商家に住み込み、その家業の手伝いをする
こと。

一 二十歳の時に徴兵検査を受けました。

徴兵検査を受けた場所は、たしか倶知安だったと思います。私は甲種合格じゃなく第一補充兵だったの。昭和17年だったと思います。現役（甲種合格）と同じく軍隊に入りました。

陸か海かの配属は、上からの命令で海軍になったんだけど、陸軍と違って、入った後にどこへ行きたいか行先を選べたんです。

あの当時海軍には色々な学校があったの。私は上海と海南島を希望して、上海に行ったんです。支那方面艦隊でした。

山育ちだったから、いくらかはそこの川に潜るとかさ、そういうのはできたけどね、海で泳いだことが無かったからもう不安でいっぱいだった。

一 入団後は毎日泳がされました。

徴兵検査は6月頃にあつて、その年の9月に横須賀の第一海兵団に入団しました。そこで、配属先について第一希望、第二希望を聞かれました。

新兵教育は上海で受けました。3ヶ月位だね。厳しいんだもの。休みは一日も無し。最初は、海軍だから当然水泳を、まず半日位やるんだわ。あとは勉強だけだね。

初めは2m位の深さから。瀬戸物のおもり錘を落として、あれを取ってこいと。2m位は簡単に行けるんだわ。段々深くなっていくの。もう4mもあつたらとても潜れないんだもの。そうしたことで、自分の身体が浮くんだということを、身をもって覚えさせられるわけ。でも覚えられない人もいたよ。体が固くなり過ぎて。人間は体の力を抜けば簡単に浮くようになっている。まして塩分のある海水は浮き易いから。

新兵教育は200人300人とかじゃなく、もつといた。部隊になる位の数がいたの。こうぼく江北部隊。それが終わって、やや一人前になる。本当に厳しい教育だった。

新兵教育が終わって実戦部隊に入る時、「お前はどこへ行きたいのか。」って聞かれて、上海で教育を受けてたから、支那方面艦隊司令部を希望したの。それが上海にあつたの。そこに入ったら「お前は船だ。」と言われた。陸戦隊に行く人もいた。みんなそういうように上から言われたわけ。

陸で転んだら痛いけど、海だと痛くない。転んでも痛くないところがいいなあと、ただそう思っただけ。

— いろいろな船に乗りました。

最初は機雷(③)を処理する掃海艇(④)。第一と第二があつてね。船は大きくないんだわ。普通の艦船は底が深いけど、掃海艇は底が円くて深くない。船体は大きく見えるけど底は深くない。

そのあと乗ったのは『蓮』『栗』^{はす}っていう砲艦 (⑤)。次は駆逐艦 (⑥)『汐風』^{しおかぜ}。そして、朝鮮近海に機雷があったので、また掃海艇に戻った。終戦の時は掃海艇でしたね。

※③機雷 : 水中に設置されて艦船が接近、又は接触した時、自動又は遠隔操作により爆発する水中兵器。機械水雷の略。

④掃海艇 : 機雷を排除し、海域の安全を図る軍艦。

⑤砲艦 : 軍艦の一種で比較的小型。火砲を主兵装とした水上戦闘艦艇。

⑥駆逐艦 : 水雷艇 (水雷装備で敵を攻撃する小型艦艇) を駆逐する (追い払う) 艦艇。元々は水雷艇駆逐艦と呼ぶ。

一 水兵ですから、最初はセーラー服の軍服でした。

配属されたばかりの時は、階級章が何もついてない黒い制服だったので、カラスと呼ばれました。次に二等水兵、一等水兵、上等水兵、兵長、その上^{の上}の下士官は二等兵曹 (陸軍では伍長)、一等兵曹 (同じく軍曹)、上等兵曹 (同じく曹長) と続くんです。私は一等兵曹まで行きました。入ったばかりの頃は、海軍の伝統のしごきだった『海軍精神注入棒』で尻を叩かれたねえ。



【二等水兵の頃】

きつかった。棒のうちはまだいいの。それよりきついのはロープ。これで叩かれたら体に絡みつくんのだわ。叩かれたところが真っ黒になってしまう。

— 機雷の処理は危険な仕事だった。

機雷は磁気機雷といって、海中の機雷を処理するのは長さが1 mちよつときる鉄の棒なんだ。それを2 mおきにワイヤーで吊って、150 m位の長さでもう一艇の掃海艇と繋げるんだわ。そして何回も行ったり来たりする。7回は行かなきゃならない。磁気機雷は磁気で引っ張られて7回目でバンって爆発するように敵はセットしてあるから、運の悪い船はちょうど7回目に当たって爆発しちゃう。機雷の信管が切れるから爆発する。機雷はどこにあるか分からないから引き上げることもできない。そういうことを休み無しにやらなきゃならない。ご飯を食べる暇も無いのさ。

三交代勤務で、交代後も船の中だからどこにも行けない。掃海任務は、湾だけでなく外海もやるんです。任務につくと陸に上がらないで、何日もやるんです。

駆逐艦にも乗りましたが、駆逐艦での私の任務は砲塔 (⑦) でした。機関砲もあれば機銃、対空砲火もありましたね。

『蓮』や『栗』という駆逐艦の主砲は12センチ砲で、砲弾の重さは1発60kg以上あって、今は機械で運ぶらしいけど、当時の私らは腕に抱えて、しかも一人で運びましたよ。落としたら大変だから緊張感もあるし、まして力がなかったら駄目さ。私はね、農家だったから、お蔭さんで米俵(1俵は60kg)を持ち上げられたから務めることができた。

※⑦砲塔 : 火砲の操作員や機構を保護すると同時に、様々な方向に照準し発射できるようにする装置。

— 実戦の経験は、もちろんあります。

敵は、船ばかりではなく飛行機。飛行機にバンバンやられるもんだからね。機関砲でも何でも炸裂しない弾があるの。それが艦艇に当たって跳ね返るから、こまい弾でもぶつかったら、全部破片でやられちゃう。昭和19年頃は日本の制空権（航空兵力で所要空域を制圧する状態）が無い頃だから。その頃は色んなことがあったの。



【二等兵曹の頃】

作戦行動は、南方、ニューギニアまで行ったの。船団の護衛だったからね、陸軍の兵隊も海軍の陸戦隊の兵隊も輸送する。そういう時には船団護衛についてく。船団全部に8隻の軍艦を置いて輸送船の護衛に回るんです。輸送船の周りをぐるぐる回って護衛するから、陸軍の兵隊から「お前達は俺達の船と反対の方に行ったんでねえか。」って言われたけれど、ぐるぐると回っているからそうなるんです。

船は8隻とも1000t位で、乗組員も150人位。艦長は少佐でした。直属の上官は分隊長といって中尉クラスでしたね。

艦隊の司令部は上海にありました。無線では暗号で艦艇とやり取りしていたけど。私達の旗艦(⑧)は『鹿島』っていう巡洋艦(⑨)でした。

※⑧旗艦：司令官やその幕僚が座乗し、指令・命令を発する艦。

⑨巡洋艦：優れた航海能力を備え、必要とされるあらゆる海域で、およそ海軍の艦艇のなすべきこと全てを行える万能艦。艦隊決戦に特化した戦艦に対して、比較的小型かつ高速。

— 船酔いは全くしませんでした。

山で育ちましたが、船酔いはしなかった。船で揺れるのは気持ちがいいもの。老年兵で一人、南方に行った時に、死にそうになったのがいたね。吐く一方で何も食べられなくて、最後は血まで吐くんだから。すぐ降ろしたけどね。南方まで行ったら、帰るのに2ヶ月もかかるからね。

— 船で辛かったことは飲み水に限りがあったこと。

乗っていて一番辛かったのは、お水だね。飲むにしても洗濯するにしても量が決められているんです。洗面器があるんですが、それに一日に1杯だけです。升目にしたら1日に1升5合位（1升は1.8ℓ、1合は180ml）。飲んだり、顔洗ったり、洗濯したり。辛かったよ。だから南方に行くのは良かったよ。向こうに行けば1日2回は必ずスコールがあるから。その時に洗濯を全部やるんです。飲み水もその時に溜めたからね。今のようにシャワーなんてありえないです。

寝る時は全部ハンモックです。上海に行っても航空隊に行っても全部ハンモックです。下士官になればベッドに寝られるけど、それ以外はみんなハンモックでした。

— 陸軍よりは規律は和やかでした。

海軍は陸軍と違ってあまり階級での差の意識がないの。艦の上では、みんな一致団結してやらなきゃならなかったからね。陸軍の人と会った時にこのようなことを話したら、話しにもならなかった。

我々は船の上では隠れるところが何もないんだから。ドンってやられたら終わりだから。敵の飛行機での攻撃は、燃料の関係で

せいぜい30分位で終わっちゃう。

私はね、戦闘では帽子も被ったことが無かった。戦闘になったらねじり鉢巻一つ。万が一海に落ちたら、着ている物のボタンを外してみんな裸になる。ヘルメットとか色々な物着けていたら邪魔で戦闘にならない。ヘルメット被ってても、砲弾に当たったら、それで終わりだもの。駄目なものは駄目だから。腹をやられたら人間は大変、内臓が破れちゃうから。

敵はガス爆弾を落としてくるんだけど、何ぼ息するなって言ったらって息をしたくなる。またガスが美味しい臭いなんだわ。ガスマスクはちゃんとあるんだけど、そんなの着けてたら動かせないの。している人もいるよ、するのが本当だから。でもあの臭いはどんな人でも負けると思うな。催涙ガスっていう涙の出るガスもあるんだわ。もう涙が出て涙が出て何も見えなくなるんだわ。

船にはもちろん軍医も乗っていたし、坊さんも乗ってたね。

食糧はあまりこなかった。漁船で運んでくれたけど。どこどこにいるって連絡がきて。だけどこれも秘密だからね。はじめは漁船だと思って警戒していなかったけれど、だんだん雰囲気がおかしくなってきた。おそらくスパイがいたのかもしれない。

— 現場では指揮もしなければなりませんでした。

私の持ち場は艦の砲塔で、下士官だったから、現場の指揮や、兵がやられれば取って代わってやらないといけない。機銃でも右に左に撃たなきゃいけないし。射手が一番攻撃してくる敵機から狙われる危険な部署で、だからみんな揃って生き残るってわけにはどうしてもいかない。

攻撃してくる飛行機は、私たちのすぐそばまで飛んでくるので、それを機銃掃射で撃ち落とさなければならぬ。昭和19年の半

ば頃からは弾丸が配給になるの。これだけは撃っていい、あとは撃つなって。弾が無いんだもの。だから逃げる方が多くなったの。機銃の弾の径は40mmだから、あれに当たったら飛行機だって落ちる。ただ、そばに来るまで撃たないから当たる方が少ない。そう簡単に当たるものではないんですよ。

機銃の訓練の時は大した厳しいことも無かったね。すぐ実戦部隊に入ったから。現場で覚える方が先だよ。ただ、銃を撃つのは好きだった。2ヶ月にいつペン陸に上がり、上海に帰るでしょ。帰ったらどこへも行かないで、上海の司令部の前にコンテビルって、イギリスの部隊が逃げた跡、そこに行ったら猟銃がいっぱいあった。それで散弾銃とライフル、2丁を持って、虎を獲りたくて近郊の竹藪に行ったのさ。虎が寝ていたと思われる所に毛が落ちている、竹藪だからすぐ分かった。虎はいることには絶対にいるんだけど、姿は一回も見なかったね。その帰りに揚子江（長江の異名。アジア大陸最長の川。）の淵に出て、散弾銃で鴨を撃つんだわ。一発撃てば5、6羽も落ちる。それを船へ帰る時のお土産にしてみました。

一 海軍では勉強しました。

私は高等小学校に行きたくても行けませんでした。海軍では戦地だからということもあって、一生懸命勉強をしました。海軍に行くとなった時、真狩に長船五右衛門って人がいて、その人は昔の海軍の帰還兵だったの。その人に「ちょっと来い。」って言われて、「お前海軍に行ったら勉強せいよ。しなかったら駄目だよ。」と言われたの。海軍には下士官の養成学校みたいものはないから、本人の勉強次第だったね。下士官になるための勉強をして、それを上官に見せてパスするかしないかで決まった。本人の

努力次第で進級したから、私らが軍隊から帰ってきた時は、みんな階級はそれぞれでしたよ。

— 終戦時は釜山で。

陛下の終戦のお言葉があった時は、釜山にいました。釜山沖にいて掃海艇に火薬を詰めていた。特攻で体当たりをするために。アメリカ軍がすぐそこまで来ていて、九州の辺りとかいっぱい来ていたから。けれど、体当たりできるわけがないの。その前に攻撃されて自爆してしまうんだわ。だからそんな機会もなく、釜山で終戦になった。上官から「武器はみんな捨てろ。」と言われて、全部海に投げて、上海に帰りました。

私達は、特に昭和19年の始まり頃から、この戦争は負けると思っていました。陸軍の東條さん(⑩)と、我々の大将、山本五十六(⑪)とは、考え方が背中合わせだったから。そんな内輪で意見が分かれてたから、勝てるわけがない。

※⑩東條英機：陸軍大将。第40代内閣総理大臣。敗戦後、連合国からA級戦犯として起訴、絞首刑となる(1948年)。

⑪山本五十六：元帥海軍大将。第26、27代連合艦隊司令長官。前線視察の際、ブーゲンビル島上空で、アメリカ軍の航空機部隊に攻撃され戦死(1943年)。

このフォークをちょっと見てください。海軍軍人しか持っていないもので、ナイフとフォークとスプーンの3つで一式になるんです。なぜ銀で作っているかという、食べ物に毒が入っていた

ら、このフォークで刺したら変色するんです。これは、弁当箱の中に隠しておいたから家に持って帰れたんです。その他は、中国軍に持ち物を調べられて、時計や手帳など全て没収されました。腕時計もしていましたが、掃海任務ですぐに駄目になってしまった。機雷の磁気が強かったから。

そんなことで、この銀のフォークは、復員してからもずっと大事にとってあります。



【海軍のフォーク】



【海軍の章である刻印があります】

一 私には酒が嫌いでした。

軍艦にはお酒類は何でも積んでいました。いっぱい積んでいました。休みの時は、わりと自由に飲むことができました。頭を空にするのはやはり酒だよね。戦争中だし、ましてや船だし、息抜きができないから。みんなウイスキーを飲むんだわ。だけど、私にはお酒が元々嫌いだった。家にいる時から飲まなかった。船の中ではみんな、飲み過ぎて人が変わるんだわ。そうになると、私も飲まなくてはその場にいられなかった。ただ、いくら飲んでも不思議に酔わない。ウイスキーでも。酒嫌いが海軍で鍛えられたせいなのか、復員してからも酒には強かったよ。

一緒に船に乗っていた同い年の人、終戦後探して留萌にいるこ

とがわかった。そのあと札幌に移り住んで、今年亡くなったんだけど、彼は一晩に90度のチャンチュウ（支那酒）一升飲むんだよ。面白い話ばかりするんだわ。普通酒飲んだらおかしくなるでしょ。けど、酒飲んだら朗らかでねえ。だはんこかない(12)からいいの。生きてるうちにもっと話しをしたかった。

復員して帰ってきた時は、1週間位続けて酒を飲んだかな。丁度帰ってきたら3月の社日祭(13)の時だったね。

※⑫だはんこく：わがまを言って騒ぐこと。北海道弁。

⑬社日うぶすななみ：産土神（生まれた土地の守護神）を祀る日。春と秋にあり、春分又は秋分に最も近い 戊つちのえ の日。古代中国に由来し、「社」は土地の守護神、土の神を意味する。産土神に参拝し、春は五穀の種を供えて豊作を祈願し、秋はその年の収穫に感謝する。

一 終戦から復員まで7か月間かかりました。

終戦の後は、アメリカ軍の収容所で使われてました。『昭和島』っていう、陸軍が揚子江を切り回して島をこしらえてたんだけど、そこへ私ら海軍の兵隊達はみんな収容された。

そこで、軽油や重油をドラム缶に詰めて搬送する仕事をさせられた。3日位やったら1日休み。食糧は海軍の司令部で持ってたんだね。自分達で調理していました。だから、そんなに食べ物には困らなかつた。

私は日本に帰る時、米1俵持って帰ってきた。それでね、東京で一泊したの。その時半分炊いた。街頭で大きな釜用意してるんだわ。で、おにぎりを作った。子ども達をはじめみんな寄ってくる。何にも食べ物が無い時だから。あの時米持って帰ってきたの

5、6人いたからね。

— 復員できることはアメリカ軍から知らされました。

本当は帰ってくるのではなかったの。今は中国の政治を執っているけど当時は八路軍^{はちろ} (⑭) です。

中国で八路軍と蒋介石^{しょうかいせき} (⑮) がいたんだわ。蒋介石が重慶(重慶市：中国の都市)からおりてきた時に八路軍に負けて、それで台湾^{たいわん} (⑯) に行ったのさ。私は収容されている時に、蒋介石の軍隊を見ました。驚いたことに兵隊10人に1丁の小銃^{しょうたくとう}だもの。あれではもう戦争に勝てるわけがない。毛沢東の八路軍はかなりの勢いだったから。日本の海軍軍人は帰さないと言われていたから、もう日本に帰らないで八路軍に加わるつもりだった。それが急にアメリカが3月に帰すっていうんだもの。したからいくらかの人が残っただけで、あらかたはその時日本に帰った。

※⑭八路軍：日中戦争時に華北方面で活動した中国共産党軍(紅軍)の通称。現在の中国人民解放軍の前身のひとつ。

⑮蒋介石：中華民国の政治家、軍人。死去するまで国家元首だったが、1949年国共内戦で毛沢東率いる中国共産党に敗れ台湾に移転し、1975年死去。

⑯台湾：連合軍最高司令官総司令部(GHQ)の一般命令第1号により中華民国軍が進駐し、実効支配開始(1945年10月)。蒋介石総統率いる中国国民政府が、首都を中国共産党に実効支配された南京から、臨時首都として台湾島の台北に移転し、実効支配する国家として再編成(1949年12月)。その後日本がサンフランシスコ講和条約(1951年)及び日華平和条約(1952年)で台湾島地域に対

する一切の権利を放棄。正式国家として承認する国は少ないが、多くの国で事実上独立国として国交に準じた関係を結んでいる。

したけど、残って八路軍に入った人達はどうなったかさ。まず、武器を持ってなかったらいかんかった。持てるはずがなかったけど。したから、軍刀だとか拳銃だとかそういう物を隠して持っていた。私も持ってた。私ら下士官になったら短いサーベルと軍刀があった。軍刀はあの当時、自動車のスプリングなんだわ。板バネで作ったの。それでも良く切れるんだよねえ。下士官になったら持ってた。それで竹なんて切ったら上手く切れるんだわ、スパッと。竹が切れれば人間も切れます。したけど、竹はスパッと切れちゃうけど、人間は軍刀で切ったってすぐには死なない。銃で撃たれたらすぐに駄目だけどね。持っていた軍刀はアメリカ軍に取られた。フォークは隠してたから持ってこられたけど。

収容所での食べ物は、美味しい物は無かった。肉なんて何も無いの。牛はね、スジだけ、硬スジ。それでもね、あのスジは2日炊いたら食べられる。あの硬いスジが。

米はあったけど、他の物がね。スジとかそういうものしか食わしてくれなかった。魚も無かったし。

上海は8月からずっと暖かいから、夜、裸になってさ。陸軍の基地だった収容所にいたから、新しい棒きれは柔らかすぎるから古い棒きれを探して、それを研いでおいたのを持って、川を潜って向こう岸まで行くの。海軍だったから水泳はお手の物だった。そして野豚を捕まえて担いで泳いで戻る。豚は当たり前前に担いだら駄目なの。逆さまにして腹を上に向ければ声を出さないの。よく行ったね。豚を担いで川の中に入って、水の中で血を抜くのさ。あちこちにアメリカ軍の歩哨ほしやうや八路軍の見張りもいたから。見つ

かってダァッと撃たれたら終わり。命懸けだった。それでも部下の手前、豚を取ってきたかった。

— 上海から船で博多へ・・・

帰れるってことになった時は、さすがにみんな喜んだねえ。昭和21年3月に上海から博多まで戦艦『朝風』で帰ってきて、そこでほとんどの者が別れました。そのあと私は列車で東京まで行って、青森で青函連絡船(⑰)に乗って函館まで、函館から汽車で倶知安まで、そして京極で降りるはずが、寝過ごしてしまって協方駅(⑱)で目が覚めたの。もうその日は汽車が来ないからどうすることもできなくて、次の日まで待って、そして留産の駅で降りて、ようやく家に着いたら夕方だった。私が帰ることは事前に母親に知らせようが無かったから、家族は当然何も知らなかった。みんな私を見て驚いていた。てっきり死んだと思っていたと思う。喜茂別から海軍に8名行ったけど、高田さんが帰って来たって聞いたけど、あとはみんな戦死だった。当時24、25歳でしたね。

※⑰青函連絡船：1908年から1988年まで青森県と北海道を結んでいた日本国有鉄道・北海道旅客鉄道の鉄道連絡船。青函トンネル開通に伴い廃止。

⑱協方駅：国鉄京極軽便線終着駅。1920年倶知安鉱山産出の鉄鉱石輸送のため設置。1970年廃止。

— 決まった家はありませんでした。

家って、決まった家なんて無かったんだわ。あちこち住み込みで奉公に行ってたから。どこかの小屋を借りて、ちょっと開けた

ら外が見えるような、昔は壁板でなく萱^{かや}で囲ってたから。朝起きたら布団の上に雪が積もってるような家だった。

自分の土地だって無いから。復員して1年位はそこかしこの農家に行って働いてたよ。

— 復員した翌年、結婚しました。

復員した次の年に、ばあさん（妻）と結婚したの。昭和22年の4月30日です。子どもは二男二女の4人です。ばあさんと結婚するってなって、ばあさんの両親から土地をいくらか貰って、農業を始めたの。

まあ、戦後の農家だから、かなり苦労したね。本当にね、貧乏って言えば、これ以上は無くなってくらい貧乏をとおしましたよ。戦後も暫くそうでした。

私自身は7人兄弟です。だけど今現在は、この前弟が亡くなったので、私と妹と兄の3人だけしか残ってないです。

親父が早く死んだから、その分長く生きてるんだと思う。あの当時、結核であつという間に逝っちゃうんだもんね。

親父のことはね、今になってみれば多少気に食わんことがある。博打が好きだったの。うちの親父の本家で競走馬が2頭も3頭もいたもんだから、親父もその気になって競走馬持ってた。そんなに1等とれるような良い馬を買えるわけがないんだ。だから逃げてきたようなもんだよ、月形からは。借金でね。水田も持っていたけど借金を返すには全然足りなかったと思う。

— 貧乏に耐えてきたから、軍隊でも耐えられた。

私は、そういうわけで寒さと暑さには強かったですね。

戦闘に出るのは何でもなかったけど、やはり一番は、水に親しむっちゃうことが、なかなかねえ。水が恐ろしいんだもの。それが治るまでっていったら、暫くかかったわ。

— 長生きしました。

掃海艇に乗っている時に、ある島に上がってね、原田中尉がスポン（亀）を3つ4つ取ってきたんだわ。私がまだカラスの時、当番でコックをやっている。それを料理したんだけど、上の連中が一つずつ摘まんだってすぐ無くなる量でしょ。美味しそうだったから、つい下士官よりも先につまみ食いしたのを見つけて、鈴木班長に提督室に連れて行かれたの。そこで原田中尉に軍刀を抜かれて危うく切られるところだった。叩かれるのは何ぼ叩かれてもいいけどね、切られたら終わりだもの。班長が私を必死にかばってくれて、これからちゃんと取り締まるから今回だけは許してやってほしいって。班長のお蔭で命拾いをしました。

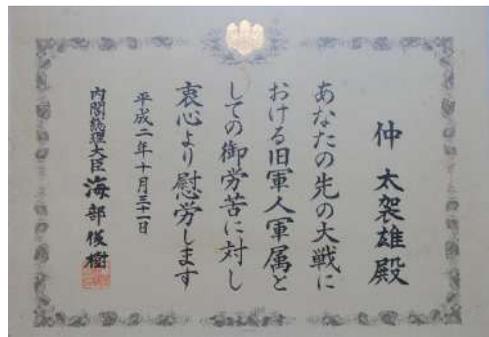
だけどね、今になってみれば、90歳まで生きるのは間違いみたいなものだもの。海軍の船に占い師をやっていた人もいたのよ。占い師がいるから、日曜になればさ、穏やかな日だったらみんな休むから、みんな占ってもらう。そしたら「あんたは今日限りだよ。」って言われた奴がいて、それが本当に死ぬんだもの。夜、島の陰で停泊するでしょ。その時は必ず交代で警備に立つ。その時に海に落ちて死んじゃった。死体も上がらなかった。そんなの見たらね、占い師もいいとこ当てるなって思ったもの。私が父親を早くに亡くしているっていうことも当てたものね。占い師から「仲さん、あんた、戦争でも何でも絶対死ねないよ。だけど77、78歳で終わりだよ。」って、はっきり言われた。だから、戦闘で

弾に当たっても絶対に死なないってことさ。それをずっと信じてきたの。それで77歳になる前の年、持っていた私の財産全部を子ども達に分けたの。そのことが頭にあったから。でも死なないんだよ、今日まで。90歳過ぎたのに。不思議だなあと思う。

— 病気はしなかったね。

病気にはならなかったね。タバコもずっと吸ってたけど、30年位前、だいぶ前に亡くなったけど、町内の柳川守さん、あの人は私の一つ年下なんだけど、喘息だったの。私と、伊藤仁三郎さんと二人で、「私達も一緒にタバコ休むからあんたも休め。」って言ったのよ。それから私は吸っていない。タバコは海軍の時に覚えたんだ。海軍のタバコは『極光』^{きょっこう}っていうタバコでした。外出にたまに出ることがあると、陸軍の兵隊と一緒にいる。「いやあ、海軍のタバコは美味しい。」って陸軍の兵隊から言われた。陸軍は『ほまれ』だったかな。

まだ言ってないことがあるんだけど、それは八路軍に入った人のこと。北海道出身の海軍の先輩なの。でもその人の名前は死んでも言えません。その人は、私らが帰る前に八路軍に入ったんだから。俺らもそのうち行くぞということで決めてたけど。



八路軍は、まずお嫁さんを5人選べと。与えるつちゅうんだから。それと食べ物も最高の物を食わすから、その代わり武器を



持って来いと。そういう宣伝工作があったんだ。その人達のことは、全部戦死ってことになってるんです。この付近にはそんな人いないけどね。例え脱走して、日本に生きて帰って来られたとしても、何も無いんだよ。

私はまだ、海部内閣の時に、政府からありがとうって言われるものをももらったけど。賞状とか懐中時計とか銀杯、万年筆をね。



一 戦争は悲惨です。

戦友会は戦後ずっとやっていましたけどね、そうだねえ、80歳のちょっと前にやめたの。もう杖に頼る人が多くなったんだわ。それと病気で障害者になった人も多くなった。こんな姿をお互いに見たり見せたりするの嫌だろってことで解散したんです。海軍の戦友会は人数が少ないから、陸戦隊も含めて、階級の上下など関係なく、帰ってこられた人間みんなと一緒にやりました。

海軍の陸戦隊は陸軍と大した変わらないんだけど、嫌なこと私らにやらせたんだわ。テロリストを捕まえる。それを私らの船によこすんだわ。処分しろって。それが一番嫌だった。嫌だけど命令だからやらんわけにはいかなかった。

傷痕軍人っているでしょ。傷痕軍人って沢山いるけど、体の傷は酷いよ。私も戦闘で機銃の破片が当たったけど、しゃがんでる時だったからまだ良かったの。立っている時に当たったら終わりだった。腹破れる奴もいたけど、もうどうしようもないんだわ。それでも自分で内臓を戻そうとする気になってたよ。あれ見たら戦争は絶対に嫌だ。

船で亡くなったら水葬にしてたよ。南方に行っていた時、亡くなった奴と、夜、一緒に寝てやった。何ほ暖かい場所でも死ねば冷たくなるからね。

うちのばあさんを連れて、香港だとかシンガポール、関東州に行きました。私が若い頃こういう所に来てたんだよって、ばあさんに教えました。最初に沖縄に行ったの。昔とは凄く変わっていて驚いた。話にも何もならないくらい変わっていた。

司令部に入った時、「アメリカに勝てば、お前らみんなアメリカ行きだぞ。」って命令だった。

終戦の時に、「ほんとは勝てたんだぞ。なぜあの真珠湾攻撃の時、アメリカ本土へ上がらなかったんだ。」ってアメリカ人の二世に言われたよ。真珠湾でいっぱいだったと思う。

そんなこともあったから、外国旅行の最初に、ハワイに行ってきたのさ。

もともっと歩きたかったけどね。ただ、上海だけはまだ行ってないの。したから、なるべく早いうちにばあさんと一緒に上海に行きたいの。

ただ一つ、昭和19年の8月頃だったと思うんだわ。敵機が飛んできてビラを撒いたんだわ。それをね、私2枚拾ったんだわ。うちのちっこい船で2枚も拾ったんだから、どれだけ多く撒い

たもんだかさ。それには、「日本の国は無くなるよ。戦争を止めなさい。マッチ箱のような爆弾一個で国は無くなる。だから絶対に戦争を止めなさい。」って、当時は気分が悪いから焼いてしまったけれど、今になると持っていればよかったなって思う。拾った人は全部焼いてしまった。

海軍での私の給料は安かった。けどね、海軍はボーナスがあったから、給料は全部母親に送っていました。

一 軍隊で得た経験は、自分の人生にとってプラスだった。

海軍での経験はやっぱり人生にプラスだったと思います。

人間は、自分のことだけではなく、人の面倒を見る人間でなかったら駄目だと思う。人の言うことを良く聴く人間でなかったら駄目だと思う。

海軍は、船という狭い空間だから、家庭的な雰囲気だった。人間関係を上手くやっていけないとならない。

帰ってくる時、陸軍の兵隊も一緒になったんだわ。したらね、一階級位上っていうだけでご飯食べる時、上下関係出すんだわ。海軍は全く違うんだもの。海軍ではみんなと一緒に食べる。陸軍はちょっと変わってると思ったね。

私は、海軍で『人の言うことを良く聴き、人の面倒を見ること。』を学ぶことができたと思っています。戦後もずっとそのことを忘れずに、今日まで生きてきたつもりです。

【支那方面艦隊】

支那方面艦隊は、昭和12年(1937年)10月に編成された、大日本帝国海軍の艦隊の一つ。

○歴代司令長官

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 長谷川清大将 | 昭和12年10月～ |
| 2. 及川古志郎中将 | 昭和13年4月～ |
| 3. 嶋田繁太郎中将 | 昭和15年5月～ |
| 4. 古賀峯一大将 | 昭和16年9月～ |
| 5. 吉田善吾大将 | 昭和17年11月～ |
| 6. 近藤信竹大将 | 昭和18年12月～ |
| 7. 福田良三中将 | 昭和20年5月～11月 |

○歴代参謀長

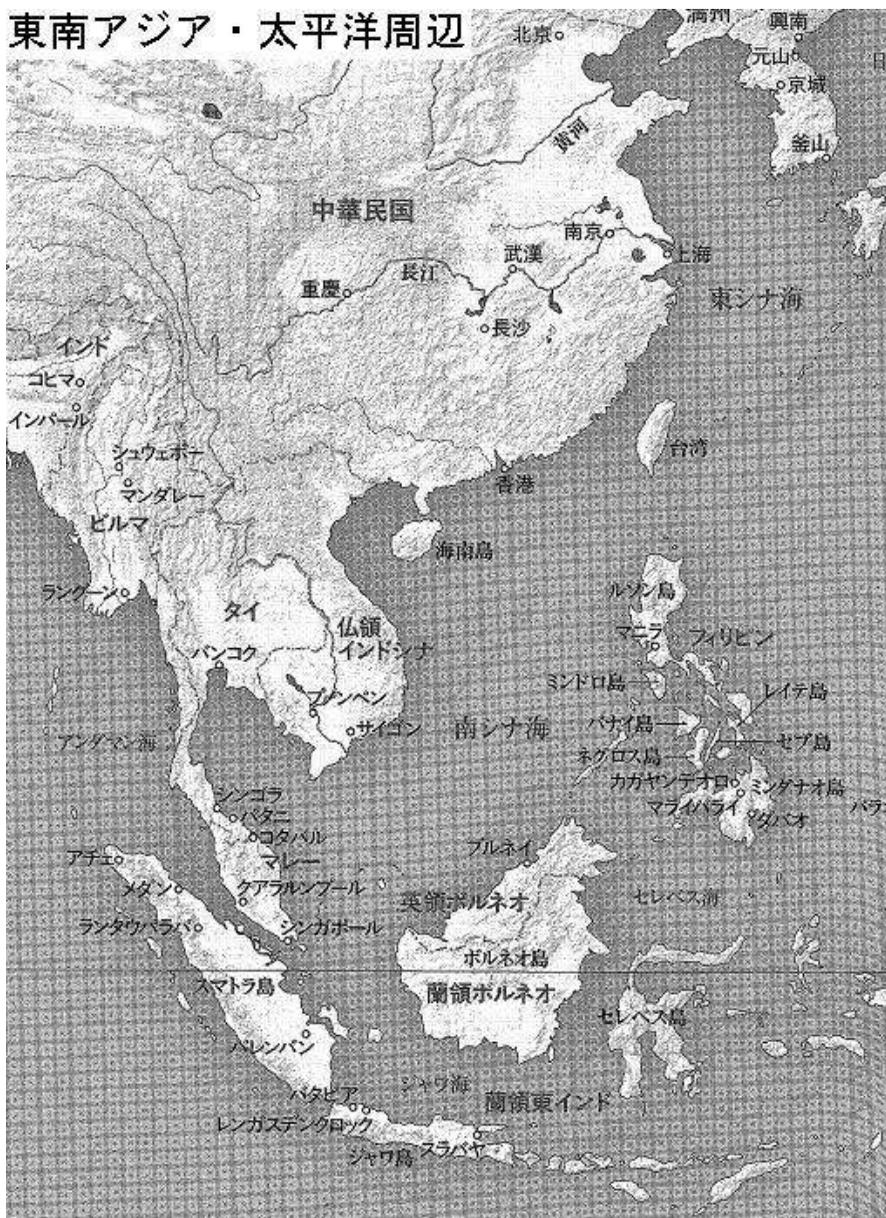
- | | |
|------------|-------------------|
| 1. 杉山六蔵少将 | 昭和12年10月～ |
| 2. 草鹿任一少将 | 昭和13年4月～ |
| 3. 井上成美中将 | 昭和14年10月～ |
| 4. 及川内傳中将 | 昭和15年10月～ |
| 5. 田結穰少将 | 昭和17年3月～ |
| 6. 宇垣完爾少将 | 昭和18年9月～ |
| 7. 左近允尚正中将 | 昭和19年12月～昭和20年11月 |

○仲さん入隊時（ミッドウェー海戦後（昭和17年7月））の編成

- ◆第一遣支艦隊 : 宇治、安宅、勢多、樫田、比良、保津、熱海、二見、伏見、隅田
- ◆第二遣支艦隊 : 嵯峨、橋立、鷗
- ◆海南警備府 : 鴻
- ◆上海方面根拠地隊 : 鳥羽、栗、柁、蓮、第13、14砲艦隊、第1、2砲艇隊、上海海軍特別陸戦隊
- ◆青島方面特別根拠地隊

(出典:Wikipedia)

東南アジア・太平洋周辺





人と自然がきらめく町

きもべつ